

漂

流

者

ALIVE

折原一

Orinichi

漂流者

ALIVE

折原 一

漂流者



折原 一

1996年8月30日 初版発行

発行者／角川歴彦
発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替 00130-9-195208
TEL 営業03-3238-8521 編集03-3238-8451

印刷所／大日本印刷株式会社
製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛に
お送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Ichi ORIHARA 1996 Printed in Japan

ISBN4-04-872991-8 C0093

漂流者

装画
藤田新策

漂流者 目次

プロローグ

7

〔第一部〕 殺意の海

13

一 「死のダイビング」

15

二 「獣は死なねばならぬ」

71

〔第二部〕 復讐の海

133

三 セーラ号の謎

135

四 セーラの逆襲

195

〔第三部〕混沌の海

227

五 漂泊海域

229

六 対決の時

274

七 混沌の海

329

エピローグ

337

プロローグ

1

『ダイバーの最期のメモ』

「……作家風間春樹さん（四三）の持ち物とみられる浮力調整ジャケットと水中メモが十日、八丈島の海岸で見つかった。

メモは風間さんが身につけていた浮力調整ジャケットから発見された。ダイブテーブル（潜水計画表）が印刷されているプラスチック板（縦約十五センチ、横約十センチ）の裏の余白に「3ヒ15ジ15フン ヒコーキみえた」などと記されていた。これは「三日の午後三時十五分に飛行機が見えた」ということで、風間さんは少なくとも三日の午後三時十五分の時点までは漂流していたらしい。……

メモはノートに付属する鉛筆で書かれていたが、走り書きで筆跡は乱れていたという。現地関係者によれば、海水温は三十度前後で、漂流していても長い時間の生存が可能だったとみられている。

しかし、浮力調整ジャケットを失った風間さんが生存している可能性はきわめて低い。ここ数日、天候が荒れて波も荒く……。

『漂流中、刻々走り書き——ダイバー遭難事故』

「風間春樹さんが残していたメモの内容は次の通り。

ツマにデキ死させられそうになった

だが ワタシは生きた

2 ヒ 10 ジ シマをでる

14 ジコロ しおにながされる

ヒョウリュウ。シマみえなくなる

3 ヒ 7 ジ めざめ

8 ジ とおくフネみえる。すぐきえる

15 ジ 15 フン ヒコーキみえた。すぐきえる

モウだめだ カツキタ

ツマをのろう

カザマハルキ」

2

某月某日

快晴。風力1。気圧1038hPa（ヘクトパスカル）。気温三十度。計器類は壊れているので、現在地がどこなのかわからない。遥か西方にピラミッド状の青い島影が見えるが、日本の領海のものとは思えない。おそらく、無人島か岩礁だろう。

昨日までの嵐が嘘のように穏やかな朝だった。鏡のような海面とはいかないが、少なくとも魚の鱗のようなさざ波が見られる。起きたのは五時半。日の出の直後だった。

今日は救命ゴムボートを海に浮かべるには最適の日だった。キャビンで死んだように眠る彼らを僕は怒りを込めて蹴った。ほとんど無抵抗の彼らはそのまま意識を失ったので、僕たちは二人を苦勞して着替えさせてからデッキに運び上げた。

.....

ゴムボートは海上に下ろすと、自動的に空気が充填され、直径三メートルほどの天幕つきのものに早変わりした。僕たちは二人がかりで、身動きしない男女をボートに乗せた。

僕は手すりに両手をかけ、右足でボートを強く蹴った。

ほとんど動きのない海だが、反動を受けたボートは静かに本船から離れていった。

「さようなら」

つぶやきが海を漂って消えていく。.....

.....

3

某月某日

今日は朝から波が荒い。ついに屈状態を脱したのだ。デッキに上がると、船が南へゆっくり動いていた。太陽が東の水平線上にぼつかりと浮かんでいる。

輝く太陽を後光のように浴びて大きな黒い影が見えた。太陽の赤い円の中にガラス細工の置物のように浮いているのだ。それはだんだん大きくなり、太陽の円をはみ出した。

ボーツ、ボーツと汽笛を鳴らして、船はセーラ号のほうに向かっている。

幻聴だろう。幻視だろう。

だが、心の浮き立った私は薄汚れたTシャツを脱ぐと、頭上でふりまわした。

「おい、ここだ。助けてくれ」

船はまっすぐこっちに向かっていた。手がちぎれるようにシャツをふると、わかったというように汽笛が二つ。

.....

日に焼けた屈強の乗組員が五人、甲板に出て、私を動物園のパンダでも見るように興味津々に見つめている。船がニュートラル状態になったのか、あたりが時ならぬ静寂に包まれた。両方の船にあたる水音がするだけだ。

燃料臭がたちこめる。どこから舞いこんだのか、上空でユリカモメが数羽、猫のような鳴き声をあげながら旋回している。

.....

船と船の距離が着実に縮まっていく。衝突しない程度に船が接近すると、今度はロープがセーラ号に投げこまれた。まるでノックアウト寸前のボクサーにリングサイドからタオルが投げこまれるように。

私は震える手でロープを受け取り、船に縛りつける。乗組員が三人、セーラ号に乗り移ってきた。.....

.....

4

「ブエナ・ヴィスタ号」の航海日誌より

某月某日

そのヨットはマストが折れ、自らの航行能力を失っているようだった。波の意のままに、木の葉のように漂っている状態だった。

乗員がいるとは考えられなかった。

いれば、船室から出てきて、こちらに合図を送ってくるはずだ。船長に報告すると、近づけるだけ近づけという指示がもどってきた。

船体には「SEIRA」とあった。どこの船なのだろう。この海域から考えると、船籍はアメリカ、日本、オーストラリア、フィリピン……。

「おーい、誰かいるのか？」

拡声器で呼びかけるが、応答はなかった。

まるで幽霊船ではないか。

船長の指示で、私はもう一人の船員とヨットに降りた。

だが、船には誰もいなかった。がらんとしたキャビンには混乱があった。そして、かすかに腐臭が漂っていた。残っていたのは……。

……………

第一部

殺意の海

